

# 「今まで」そして「これから」

高井 雅美

富山県立総合衛生学院第一看護学科

私は、助産婦や看護婦として7年間病院勤務をした後、看護学校の教員となって3年目を迎えました。病院勤務時代は、2年から3年ごとに勤務病棟を異動、3か所の病棟で看護職としての経験を積むことができました。

つまり私は、3年以上同じ場所で勤務したことがないわけです。そんな私が、看護教員としての年月をこれからも積み重ねるとすれば、それは私自身にとって、記録的な体験となります。

2年から3年での異動を経験してきた私は、看護職としての年齢こそ重ねても、その勤務場所では常に新米であり、新しい出会いの場でもありました。そのような環境の中では常に新鮮な気持ちで日々を過ごすことができ、刺激的でした。そして私は、毎日が楽しかったのです。

看護教員としての4年目以降を新鮮で刺激的な日々とするために、今までの教員としての3年間の振り返り、反省すべきことは反省していきたいと思います。そこで、教員としての3年間の振り返ってみることにしました。

## 私の3年間

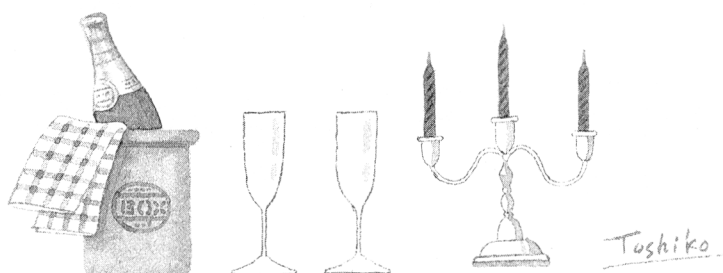
私が、新米看護教員として初めて担当した学生は、入学したての新1年生でした。それから現在までの3年間、続けて担当となりました。入学したてのういういしい学生たちと自分の姿をいつも忘れないよう、集合写真をデスクに飾っています。実習に行き始めた頃の緊張した面もちの彼女たちのことも忘れられません。

その学生たちも最終学年となり、それぞれの進

路について自分なりの考えをしっかりと持ち、話しています。その姿に、3年間の成長を感じています。看護学校の3年間という期間に、自分のこれからの進路を明確にして旅立とうとしているその成長ぶりは、驚くばかりです。毎日著しく成長する学生に、多くのことを教員として、人間として学ばせてもらいました。その学生たちに、私は何ができただろうかと振り返ると、反省することばかりです。

私たちの学校に年1回発行の『轍』という機関誌があります。そこに、学生は2年連続して私を“てんてこまいしている”と評してくれています。私自身は、2年目には、それなりに落ち着いて看護教員として行動していたつもりでしたが、どうやら学生たちは冷静に私の行動を評価してくれていたようです。

また、進路相談を受けていると、学生からよく「どうして先生になったんですか?」「どうして看護婦(助産婦)さんになったんですか?」という質問を浴びせられます。こんな時、いつも内心「ドキッ」とさせられます。それは、この質問に対してさほど立派な理由を持っていないからです。看護職としての明るい未来を思い描いている学生に、私は夢をもてるような答えを持っていないんだと実感してしまう瞬間です。学生に何か夢がもてるような返答ができるようになるには、助産婦として、看護婦として、教員としての自分自身が、成長していかなければならないことを痛感しています。



## エジプトを旅して

私は、仕事の充実のためには遊びの充実が欠かせないと、年に1回、大いに楽しむべく海外旅行をしています。始めのうち、海外旅行はかっこよく「ヨーロッパ方面じゃないとね」ぐらいの気持ちでした。それが、去年の8月にエジプトのツアー旅行をして、神秘的な地を冒険する楽しみを感じました。エジプトにはずっとあこがれを抱いていましたが、友人には「ヨーロッパはいいけど、エジプトはちょっとね……」と言われ、エジプト旅行はできないでいました。しかし、世の中には同好の士がいるもので、厚生省看護研修研究センターでの友人の西畑さんに「いいねえ」と賛同してもらい、2人でエジプト旅行に出かけることになりました。お互いに「エジプトに行ってくれるのはこの人しかいない」という思いだったわけです。

また普通、バカンスといえば、暑いときには避暑地に行けばよいものを、あえて暑い季節に猛暑のエジプトを訪れるのは、よっぽどの物好きとしか考えられません。相棒の西畑さんは暑さには強い南国生まれの南国育ち。おまけに、文明の利器であるクーラーがさほど好きではありません。エジプト旅行のパートナーとしては申し分のない理想の人材です。

しかし、クーラーが大好きで北陸生まれの北陸育ちの私としては、エジプトの猛暑が出発前から恐怖でした。おまけに、出発前のオリエンテーションでは、添乗員さんから赤痢予防のため「生水、

生野菜、果物の摂取禁止令」も言い渡されました。「暑い、食べるものがない」その恐怖を背負って関西空港を旅立ちました。でも「ピラミッドが見たーい」、「スフィンクスに会いたーい」という強い願いが、そんな恐怖を上まわっていました。

エジプトを観光しだしてからは、気になるのは日中の暑さだけでした。そんな暑さを、一瞬の日陰が忘れさせてくれます。普段何とも思わない日陰が、ここエジプトでは、大切な安らぎの場となっていることに気づかされます。

## 「これから」につなげるために

看護学生と接する私も、エジプトで体験した強い日差しの中の日陰のような役割が求められているのかもしれませんが。常に何かを教員として学生に与えることだけではなく、学生たちの安らぎの場として存在することも大切だと感じました。

エジプトの猛暑は、普段は何気ない日陰のありがたさを感じさせてくれました。このような暑さと日陰の関係は、お互いがあるからその存在の大切さが引き出されます。教員としての私と看護学生の彼女たちとの関係においても、お互いがあるからその大切さが引き出される、そんな自然な関係になればいいと思います。

教員として、学生に関わる自分の責任の重大さを認識しながら、学生から得られる数々の学びを大切に、学生にとって安らぎの場となれるよう、努めていくつもりです。

次のバトンを立て野裕子さんに渡します。